

国指定史跡

ふる
つ
は
ま
ん
や
ま

古津八幡山遺跡 歴史の広場

弥生の丘展示館ガイドブック

No.2

(弥生時代編)

このガイドブックの発行は、弥生時代の遺跡を、市民のみなさんに紹介し、その歴史を伝えること、また、その歴史を伝えること、また、その歴史を伝えること、

弥生の丘展示館 ガイドブック No.2 (弥生時代編)

【発行】
平成25(2013)年3月

【編集・発行】
新潟市文化財センター
〒950-1122 新潟市西区本場2748-1
TEL 025-378-0480 FAX 025-378-0494
Email bunkazai@city.niigata.jp

【印刷・製本】
株式会社 ハンクラフ
〒950-2022 新潟県新潟市西区小針1丁目11番6号
TEL 025-233-0321 FAX 025-233-0322

古津八幡山遺跡の発見から現在までの歴史

古津八幡山遺跡は1987年の土取り工事に伴う確認調査により発見され、新潟県内最大規模の古墳と弥生時代後期の大規模な高地性環濠集落であることが明らかになりました。重要な遺跡であることから、1990年には遺跡の主要な範囲が現状のまま保存されることになりました。発見から保存が決定するまでに、多くの方々の様々な運動がありました。2005年7月14日に国指定史跡になり、2011年に古津八幡山古墳が追加指定となりました。現在は119,641.23㎡の範囲が国指定史跡となっています。1987年の第1次調査から2012年の第18次調査まで発掘調査が行われてきました。今後も遺跡の内容を究明するための発掘調査が計画されています。2007年からは遺跡の内容が明らかになった部分から史跡整備に着手しています。

年代	古津八幡山遺跡に関する出来事	
	開発と発掘調査に関する出来事	遺跡保存と史跡整備に関する出来事
1940	古墳周辺に畑が造成され、谷には水田がつくられる 杉が植えられる	
1970	金津丘陵一帯に柿畑が造成される(1970～1971年頃) 古墳の上に国設環境大気測定局新津測定所が建てられる(1976) 古墳の上に畑が植えられる(1976)	
1985	60年 新潟県教育委員会による詳細分布調査で農村製鉄跡が見つかる	
1987	62年 第1次確認調査(9/28～10/9)八幡山遺跡が古墳である可能性が指摘される。古墳盛土より弥生時代の竪穴住居が見つかる 古津八幡山遺跡の発見 第2次確認調査(11/24～12/8)	金津丘陵で約45haの範囲で巻越自動車道建設等に伴う土取りが計画される
1988	63年 八幡山遺跡発見通知(3/8)八幡山遺跡として登録される 金津丘陵埋蔵文化財発掘調査開始(6/1) 第3次確認調査(6/23～9/16)北地区で環濠・竪穴住居16棟・竪穴(前方後方形周溝墓)などが見つかる 第4次確認調査(9/21～10/3)南地区で土器や石器などの遺物が見つかる 第5次確認調査(11/9～11/16)南地区で竪穴住居などが見つかる	・旧新津青年会議所を中心に結成した新津の古代と今を考える集い(新古今集)主催「新津の古代に思いをはせる」講演会 調査担当 坂井秀弥氏・新潟大学 甘粕健氏(2/11) 新津市文化財調査懇話会が「古津八幡山遺跡保存に関する提言書」を提出(2/12) ・新潟産業考古学会主催 新潟大学 甘粕健氏記念講演会(4/24) ・旧新津青年会議所主催 奈良文化財研究所 在原真氏記念講演会(9/4) ・古津八幡山遺跡現地説明会(9/10) 同志社大学校友会新潟支部主催 同志社大学 森浩一氏記念講演(10/24) 新潟県内在住日本考古学会会員が「八幡山・蒲ヶ沢遺跡群の保存要望書」を提出(11/28)
1989	1年 金津丘陵製鉄遺跡群埋没地の発掘調査(1989～1991)多くの製鉄炉・木炭窯が見つかる	郷土史研究会が「八幡山・蒲ヶ沢遺跡群の保存要望書」を提出 署名数6422名(4/13) ・日本考古学会が「新潟県新津市八幡山遺跡の保存に関する要望」決議(5/27) 文化財保存全国協議会が「新津市蒲ヶ沢遺跡群保存要望書」を提出 署名数1200名(8/15) 金津丘陵製鉄遺跡群の現地説明会(10/21) 日本考古学会が「八幡山・蒲ヶ沢遺跡群の保存要望書」を提出(12/5)
1990	24年 第6次本調査(5/26～7/9)南地区 第7次確認調査(7/23～8/10)南地区で環濠(条溝1)・竪穴住居5棟などが見つかる	・遺構破壊事故による、新潟県教育委員会から発掘調査中止命令出される(7/7) 新潟県教育委員会と新津市教育委員会が現状保存範囲を合意 遺跡のおもな範囲約19.7haが現状のまま残されることになる(11/29) 自治体ふるさとづくり事業「花と遺跡のふるさと公園」として整備工事が始まる(1990～1992)
1991	3年 第8次本調査(5/20～10/31)南地区で竪穴住居・伏せ焼の炭窯(竪土炉)が多く見つかる 古津八幡山古墳測量調査(6/25～8/31)代表 新潟大学考古学研究室 甘粕健教授	
1993	5年 第9次確認調査(9/21～11/5)古墳北側に環濠(外環濠A)が見つかる	
1994	6年 第10次確認調査(9/16～11/14)墓(方形周溝墓)2基などが見つかる。その埋葬施設から鹿角の骨がついた鉄剣が見つかる	
1995	7年 八幡山遺跡から新潟県立植物園一帯の約45haが花と遺跡のふるさと公園になる(8/25)	
1996	8年 新潟県埋蔵文化財センターオープン(10/1) 新津市田の石油採掘事業が完全に停止する	
1997	9年 新津美術館オープン(10/1)	
1998	10年 新潟県立植物園オープン(12/1)	
2000	12年 第11次確認調査(7/3～7/7)環境省大気観測所撤去に伴う古津八幡山古墳の確認調査のための事前調査を行う	
2002	14年 第12次確認調査(3/16～5/18)環境省大気観測所撤去に伴う古津八幡山古墳の発掘調査を行う 第13次確認調査(6/3～10/7)環濠(外環濠B・C、内環濠A・B)の各末席が見つかり、各所で分断していることがわかる。竪穴住居を埋めて環濠がつくられていることがわかる	
2003	15年 第14次確認調査(5/23～10/23)環濠(外環濠D)などが見つかる。北東地区で竪穴住居が見つかり、集落が広がっていることがわかる	・八幡山遺跡整備基本構想策定委員会の開催(新津市教育委員会)(8/11)
2005	17年 古津八幡山遺跡整備基本計画策定委員会の開催(新津市教育委員会)(1/21・3/3) 「古津八幡山遺跡」保存整備基本計画報告書(新津市教育委員会)刊行(3/8) 「古津八幡山遺跡」として、115,803.23㎡が国の史跡に指定される(7/14) 古津八幡山遺跡保存整備検討委員会の開催(新潟市)(8/11～) 「史跡古津八幡山遺跡保存整備基本設計(新潟市)」刊行(3/24) 整備実施設計着手(2006～2008)、現況地形測量(2006・2007)、雄生復元移間伐(2006～)、地質調査実施	
2006	18年 第15次確認調査(9/25～11/10)東側斜面で製鉄関連の遺構が見つかる	・既存施設撤去工事 整備工事着手(2007～) 竪穴住居5棟復元 竪穴住居2棟復元 西面中谷内遺跡 東面大浦下遺跡 雄生の丘展示館建設実施設計 雄生の丘展示館建築工事 展示実施設計
2007	19年	
2008	20年	
2009	21年	
2010	22年 第16次確認調査(6/14～7/24)外環濠Dの南東端が見つかる 東京工業大学により古津八幡山古墳レーダー探査実施	
2011	23年 第17次確認調査(7/11～11/25)古津八幡山古墳の確認調査 墳丘の盛土・周濠のようすがわかる	3,838.00㎡が追加指定となり、国の史跡の合計面積は119,641.23㎡となる(2/7)
2012	24年 第18次確認調査(5/29～12/25)古津八幡山古墳の確認調査 古津八幡山古墳墳頂部などの確認調査	・雄生の丘展示館の展示制作 古津八幡山遺跡歴史の広場オープン(4/21)
2013	25年	
2014	26年	・古津八幡山古墳整備工事予定(2013～)

新潟市周辺の弥生時代・古墳時代の遺跡分布

弥生時代の遺跡は沖積地には多くないことがわかります。江南区や北区では、砂丘上に遺跡が列状に分布しています。秋葉区古津周辺や加茂市の平野部の遺跡は扇状地に立地しています。沖積地では古墳時代になると集落がつくられるようになります。

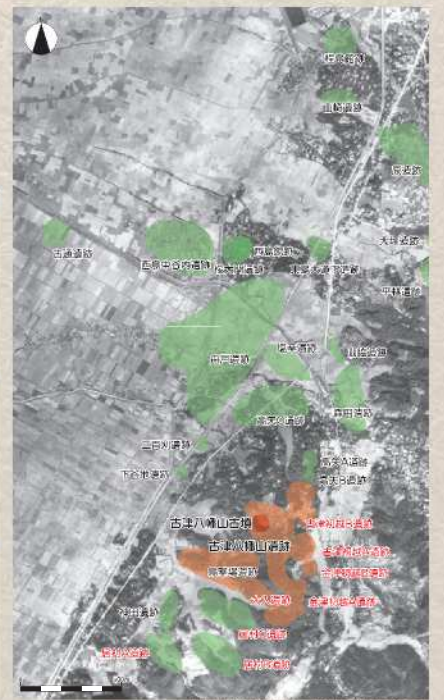


古津八幡山遺跡周辺の遺跡

古津八幡山遺跡周辺には、弥生時代後期から古墳時代中期の遺跡が多く見られます。弥生時代後期の約250年間のみ、丘の上に集をめぐらした大きな集落(古津八幡山遺跡)が広がります。古墳時代になると新潟県内最大の古墳(古津八幡山古墳)が丘の上に築かれます。麓には古墳時代の集落が広い範囲に分布しています。古墳を築いた王の屋敷(居館)もどこかに埋まっていることでしょう。南側の山麓には奈良時代・平安時代の製鉄遺跡が広い範囲に分布しています。

古津八幡山遺跡周辺の遺跡一覧表

遺跡名称	弥生時代		弥生時代			古墳時代			奈良時代	平安時代	鎌倉時代	室町時代
	前期	中期	後期	前期	中期	後期						
北山遺跡												
山崎遺跡												
中津遺跡												
高天A遺跡												
高天B遺跡												
新津北遺跡												
神田遺跡												
二宮丸遺跡												
下谷池遺跡												
雄生遺跡												
山崎遺跡												
内戸遺跡												
高天C遺跡												
古津八幡山遺跡												
古津八幡山古墳												
大津遺跡												
松大門遺跡												
西面中谷内遺跡												
東面大浦下遺跡												
古津遺跡												
部村A遺跡												
部村B遺跡												
部村C遺跡												
古津切跡A遺跡												
古津切跡B遺跡												
金津切跡A遺跡												
金津切跡B遺跡												
大久保遺跡												
大久保遺跡												



赤字は製鉄遺跡、黒字は確認、遺跡の名称。山の写真は1917年9月20日半干渉写真複製品、4%の拡大。

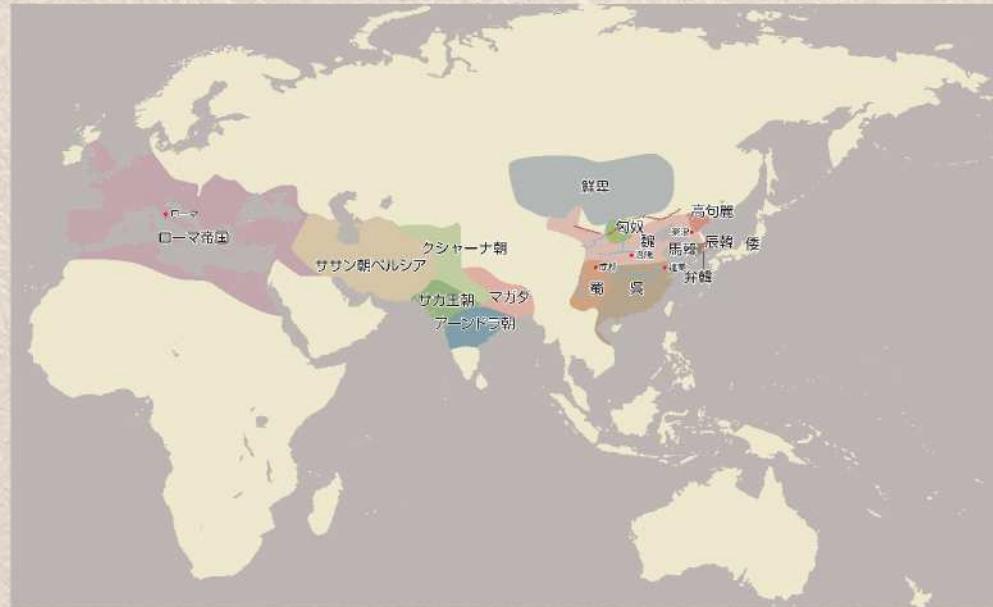
3世紀頃の世界地図

古津八幡山遺跡で高地性環濠集落がつくられた頃の世界地図です。日本は、中国の歴史書『魏志倭人伝』に邪馬台国の女王卑弥呼のことが書かれた頃です。朝鮮半島は馬韓・弁韓・辰韓の三韓、中国は魏・呉・蜀の三國の時代でした。遠くヨーロッパではローマ帝国が地中海周辺から西ヨーロッパに及び大國となっていました。

世界史の年表

紀元前1世紀	紀元前1年～紀元前100年
1世紀	1年～100年
3世紀	201年～300年
21世紀	2001年～2100年

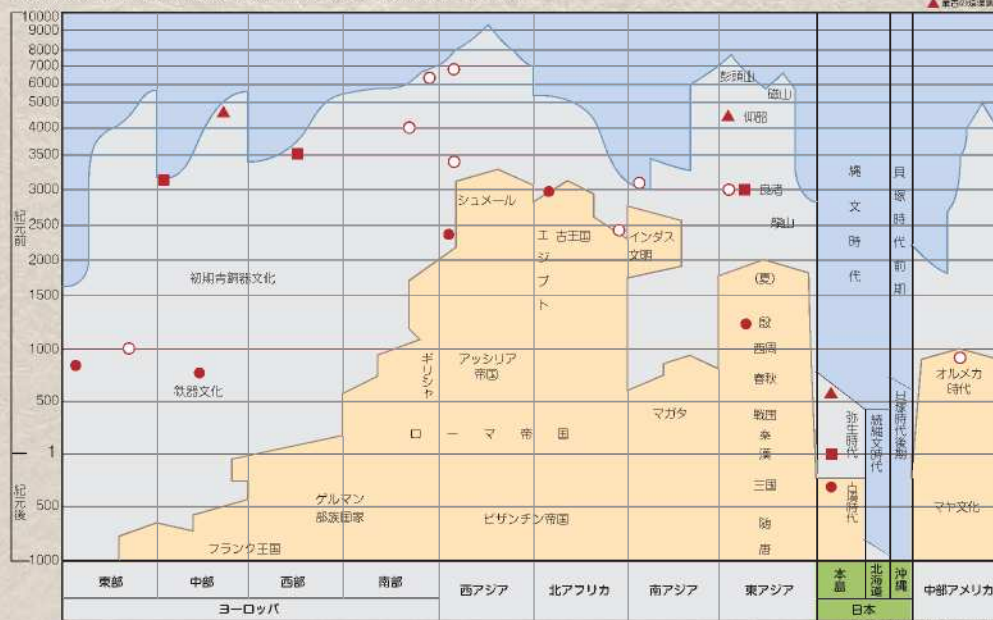
(例) 世界史の年表は、1992年10月1日現在のもので、1992年10月1日以後の出来事は記載していません。



世界史の中の日本列島

日本では食料採集段階の縄文時代は1万年以上と長く続きました。世界史的にみると農耕社会に属する弥生時代の始まりはとも違がったのです。しかし、水田稲作が始まると、環濠集落・埴井墓がまもなくあらわれ、やがて王権が成立し、最古の王墓—古墳—が築かれます。その間の約1000年は世界史的に見れば、とても短期間のことでした。

- 環濠集落 農耕の始まりまで田畑に耕作
- 遺跡 土を掘ってつくった土器・土器の歴史
- 王権 有力者が土地を支配した専制
- 古墳 古墳時代につくられた石や土の墓



小野 善雄、小出 邦昭 1992 原田 和典 監修

古津八幡山遺跡の歴史

古津八幡山遺跡周辺に遺跡が残された旧石器時代から平安時代にかけての歴史年表です。中でも、弥生時代後期から古墳時代中期と、奈良時代から平安時代の2時期に遺跡の中心があります。

中国	朝鮮	日本	おもな出来事	古津八幡山遺跡周辺のおもな出来事
旧石器時代	旧石器時代	旧石器時代	火槍が石器土器がつくられ、火元が埋められる	新潟市内の最古の石器が発見される(古津八幡山遺跡) 石斧や骨針が残される(佐野浜遺跡・古津八幡山遺跡)
新石器時代	新石器時代	縄文前期	稲作が本格的に広がり、米の栽培の大量の発見 漁を主とした生活が中心になり、各地に貝塚が築かれる	
		縄文中期	稲作が本格的に広がり、米の栽培の大量の発見 漁を主とした生活が中心になり、各地に貝塚が築かれる	
		縄文後期	稲作が本格的に広がり、米の栽培の大量の発見 漁を主とした生活が中心になり、各地に貝塚が築かれる	
		縄文終末期	稲作が本格的に広がり、米の栽培の大量の発見 漁を主とした生活が中心になり、各地に貝塚が築かれる	
新石器時代	新石器時代	縄文時代	稲作が本格的に広がり、米の栽培の大量の発見 漁を主とした生活が中心になり、各地に貝塚が築かれる	
夏				
殷				
西周				
春秋		青銅器時代	東北地方を中心に農耕文化が広がる 九州で環濠水田・環濠集落・大形環濠・大形環濠が築かれる	平野に環濠水田や環濠集落が築かれる(大沢谷内遺跡)
戦国			弥生文化が本格的に広がる 畿内川下流域に稲作が広がる 近畿地方に環濠集落が広がる	
秦		弥生時代		青銅器がつくられる(土上町環濠遺跡) 弥生土器が残される(秋葉遺跡)
漢		原三田時代	環濠集落を中心に稲作集落が広がる 個人は百石以上になり、一部は環濠集落と交易をもつ(環濠集落)	土器がつくられる(土上町環濠遺跡) 弥生土器が残される(秋葉遺跡)
魏		前漢	環濠集落を中心に稲作集落が広がる 個人は百石以上になり、一部は環濠集落と交易をもつ(環濠集落)	土器がつくられる(土上町環濠遺跡) 弥生土器が残される(秋葉遺跡)
新		後漢	環濠集落を中心に稲作集落が広がる 個人は百石以上になり、一部は環濠集落と交易をもつ(環濠集落)	土器がつくられる(土上町環濠遺跡) 弥生土器が残される(秋葉遺跡)
後漢		三國(魏・蜀・呉)	環濠集落を中心に稲作集落が広がる 個人は百石以上になり、一部は環濠集落と交易をもつ(環濠集落)	土器がつくられる(土上町環濠遺跡) 弥生土器が残される(秋葉遺跡)
西晋		五胡十六國	環濠集落を中心に稲作集落が広がる 個人は百石以上になり、一部は環濠集落と交易をもつ(環濠集落)	土器がつくられる(土上町環濠遺跡) 弥生土器が残される(秋葉遺跡)
北魏		北魏	環濠集落を中心に稲作集落が広がる 個人は百石以上になり、一部は環濠集落と交易をもつ(環濠集落)	土器がつくられる(土上町環濠遺跡) 弥生土器が残される(秋葉遺跡)
南朝		南朝	環濠集落を中心に稲作集落が広がる 個人は百石以上になり、一部は環濠集落と交易をもつ(環濠集落)	土器がつくられる(土上町環濠遺跡) 弥生土器が残される(秋葉遺跡)
隋		隋	環濠集落を中心に稲作集落が広がる 個人は百石以上になり、一部は環濠集落と交易をもつ(環濠集落)	土器がつくられる(土上町環濠遺跡) 弥生土器が残される(秋葉遺跡)
唐		唐	環濠集落を中心に稲作集落が広がる 個人は百石以上になり、一部は環濠集落と交易をもつ(環濠集落)	土器がつくられる(土上町環濠遺跡) 弥生土器が残される(秋葉遺跡)
五代十国		五代十国	環濠集落を中心に稲作集落が広がる 個人は百石以上になり、一部は環濠集落と交易をもつ(環濠集落)	土器がつくられる(土上町環濠遺跡) 弥生土器が残される(秋葉遺跡)
宋(北宋)		宋(北宋)	環濠集落を中心に稲作集落が広がる 個人は百石以上になり、一部は環濠集落と交易をもつ(環濠集落)	土器がつくられる(土上町環濠遺跡) 弥生土器が残される(秋葉遺跡)
宋(南宋)		宋(南宋)	環濠集落を中心に稲作集落が広がる 個人は百石以上になり、一部は環濠集落と交易をもつ(環濠集落)	土器がつくられる(土上町環濠遺跡) 弥生土器が残される(秋葉遺跡)
元		元	環濠集落を中心に稲作集落が広がる 個人は百石以上になり、一部は環濠集落と交易をもつ(環濠集落)	土器がつくられる(土上町環濠遺跡) 弥生土器が残される(秋葉遺跡)
		鎌倉時代		土器がつくられる(土上町環濠遺跡) 弥生土器が残される(秋葉遺跡)

弥生時代になって現れた諸事象

事象	現れる時期	備考
1 灌漑耕作	早期以後	九州(早期～)から東北北部(前・中期)までおよぶ
2 環濠集落	早期以後	北部九州(早期～)から関東・北陸北部(中期中頃～)まで
3 集団間の争い	早期以後	北部九州に顕著で、中期後半以後、中部以西に認められる
4 金属器(青銅器と鉄器)	前期末か 中期初頭以後	東日本では中期中頃以後普及していく
5 社会的階層の顕在化	中期初頭以後	九州に顕著で、九州以外ではようやく後期後半に目立つようになる
6 政治的・社会的傾斜	中期後半以後か	

©2011 株式会社NHK

弥生時代を定義する

日本列島で灌漑を伴う本格的な水稲耕作をはじめた紀元前9世紀から定型的な前方後円墳が出現する3世紀中頃までの後半までの時代を弥生時代といいます。新潟県や東日本では、紀元前4世紀後半ないし5世紀前半頃から弥生時代になると考えられています。弥生時代を特徴づけるものは、①灌漑耕作、②環濠集落、③集団間の争い、④青銅器や鉄器などの金属器、⑤社会的階層の顕在化、⑥政治的・社会的傾斜などです。

弥生文化を構成する3要素

3要素	具休例	古津八幡山遺跡の場合	
A 大陸から伝来した要素	舶来品(中国系)	金印 貨泉 銅鏡 素環刀など	—
	舶来品(朝鮮系)	多鈕鏡 細形銅剣 銅矛 銅戈 有柄磨製石剣 磨製石鏃の一部など	鉄剣
	技術・知識	稲作 青銅器鍛造技術 鉄器鍛造技術 大形系磨製石器3種セット 石高丁などの取極具 紡織技術 高床倉庫など	稲作 石斧 石高丁 布(新羅車) ガラス玉
B 縄文文化からの伝承として引き継いだ要素	器物・技術・知識	各種農耕備具 ト骨(占用) 鳥形木製品 支石墓 厚葬(副葬品を副葬して手厚く葬る)など	鳥形 鉄剣 石鏃の副葬
	弥生文化で固有の発達を遂げたもの	打製石器の技術 打製石鏃 石鏃・土掘り具 勾玉 土器の製作技術・形・文様 木器や骨角器とその製作技術 漆器とその技術など	石鏃 石鏃 勾玉 縄文を施した土器
C	大陸化・装飾化した銅鐸・銅剣・銅矛・銅戈 巴形銅器や有柄銅剣 石鏃 石戈と鉄戈 磨製鏃 方形周溝墓など	石鏃 方形周溝墓	

図解1375/6/11(2010年6月に作成)

弥生土器

弥生土器は日本で食料生産を基盤とする生活が始まった時代の土器です。定型的な前方後円墳が出現した古墳時代の土器は「土師器」といいます。次のような特徴があります。

- 1 農民の土器
- 2 ロクワを使用しないでつく
- 3 窯を使用しないで、1000度未満の酸化焼で焼きあげる

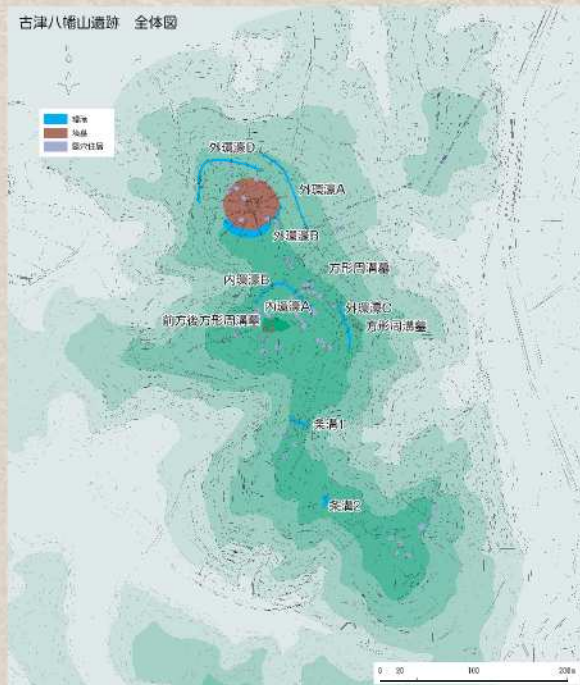
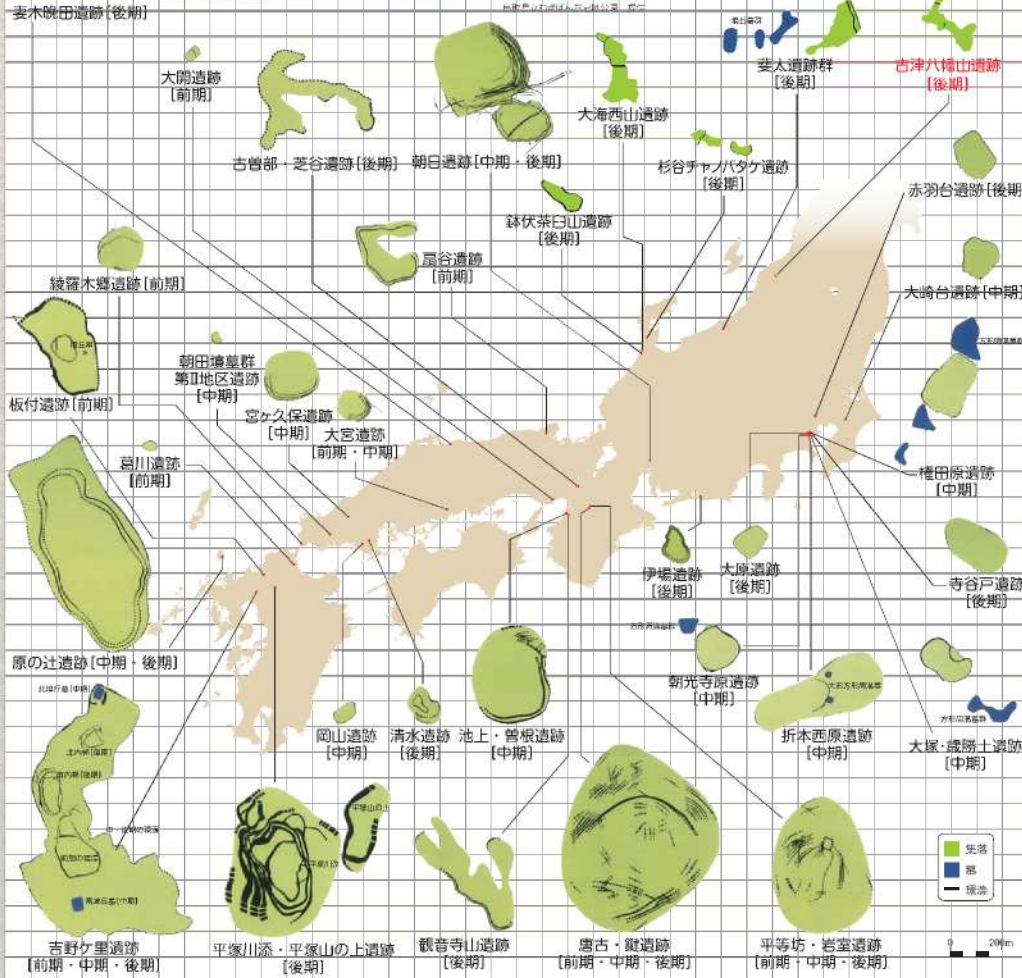
土器の用途としては、次のようなものがあります。

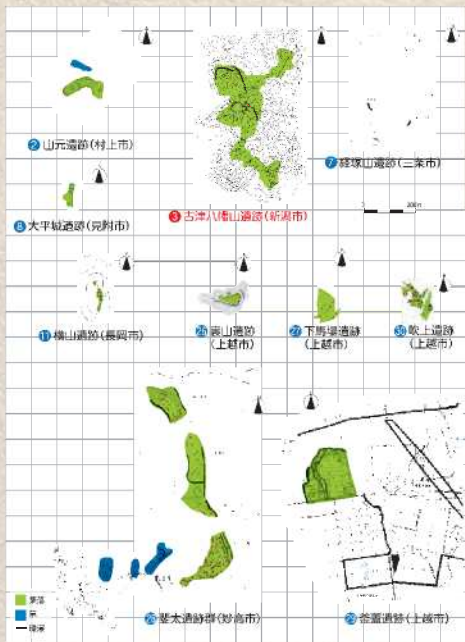
- 1 火にかける
- 2 捧げる
- 3 盛りつける
- 4 水をくむ
- 5 たくわえる



主な環濠集落の分布と規模

周囲を濠で囲んだ弥生時代の集落。外敵からの防禦のためにつくられたと考えられています。古津八幡山遺跡では環濠の外側に土壁をめぐらしていたと推測されます。環濠集落は、弥生時代早期には北部九州に出現し、中期には北部九州から東海地方まで広がります。中期後半には関東で急増します。後期になると北陸で増加し、長野にも出現します。多くの環濠集落は後期終末になると濠が埋没し、集落も廃絶します。

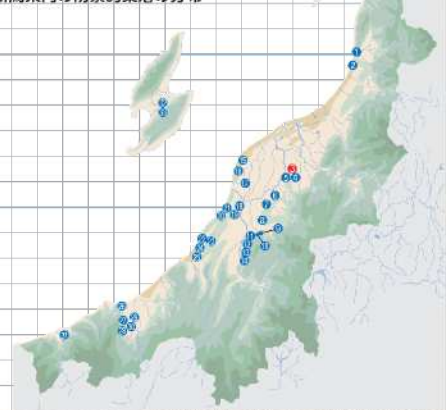




新潟県内の防衛的集落 邪馬台国の頃の古津八幡山遺跡

越後平野では弥生時代後期になると、平地から30m以上の丘の上に集落(高地性集落)が出現します。水稲耕作に向きなことと、周囲を濠で囲んでいる集落(環濠集落)があることから中国の歴史書『魏志倭人伝』に書かれた『倭国乱』と関連づけて戦いに備えた防衛的集落と考えられています。越後平野では新津丘陵から長岡市の東山丘陵にかけて平野を見下ろす丘陵上に多く発見されています。これらの集落の多くは弥生時代後期末期にはなくなります。古津八幡山遺跡は会津盆地へのルート(記号あり)と上越市裏山遺跡は長野県北部への南へのルートと日本海沿いの東西ルートの接点にあたり、いずれも交通の要衝でした。

新潟県内の防衛的集落の分布



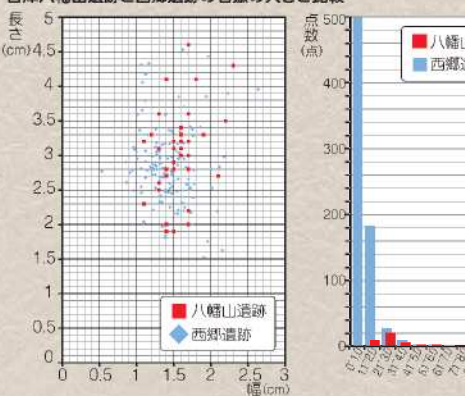
資料:新潟県立文化財調査センター2005年『新潟県防衛的集落の分布』P.117

戦いの証拠を考古学で探る

佐原真さんによる戦争の証拠	古津八幡山遺跡で戦いはあったのか?	
	肯定的要素	否定的要素
1 守りの村 防壁・濠などで囲まれた村(環濠) 丘の上の村(高地性集落)	○ 環濠・高地性集落 環状住居・濠	○ 集落全体を囲まず、途切れ途切れの濠
2 武器の存在 古い矢尻・射・箭・戈、墓石斧・つぶて石 守りの武器である鉄器(盾・よろい・かぶた)	○ 石の穂・石の矢尻 鉄の矢尻 鉄剣・つぶて石	○ 副葬品の可能性 副葬品の可能性もある
3 殺傷された人の遺体 戦士の墓	○ 方形周溝墓の埋葬施設から見つかった矢尻	○ 副葬品の可能性もある
4 武器をそえた墓 遺体に副えて武器を葬る	○ 方形周溝墓の埋葬施設から見つかった鉄剣	○ 副葬品の可能性もある
5 戦力を示す 武器の形を模した祭り・儀式の道具	○ 方形周溝墓の埋葬施設から見つかった鉄剣	○ 副葬品の可能性もある
6 戦いの場面を表した遺形品 戦士・戦争の場面	○ 方形周溝墓の埋葬施設から見つかった鉄剣	○ 副葬品の可能性もある

佐原真さんによる戦争の証拠(佐原真氏による調査)について検討すること、また、その結果をまとめた『戦国時代の考古学』(佐原真氏著、1999年)

古津八幡山遺跡と西郷遺跡の石鏃の大きさ比較



古津八幡山遺跡と西郷遺跡の石の矢尻の大きさ比較

古津八幡山遺跡の石の矢尻の大きさの平均は幅1.6cm、長さ3.0cm、重さ1.9gです。一方、弥生時代前期～中期の西郷遺跡では幅1.1cm、長さ2.0cm、重さ0.9gです。西郷遺跡に比べ古津八幡山遺跡の石の矢尻は大きく、重くなっています。



新潟県内の防衛的集落(高地性集落・環濠集落)

No.	遺跡名	弥生時代		標高	地層の厚さ	高地性集落	環濠	遺構・おもな遺物	おもな土器群
		中層	後層						
1	湯ヶ前遺跡(村上市)	●	●	42m	40m	●	●	竪穴住居(3中層)	東北系
2	山ノ内遺跡(村上市)	●	●	40m	39m	●	●	竪穴住居(弥生前期) 竪穴住居(弥生中期)	東北系
3	古津八幡山遺跡(村上市)	●	●	33m	30m	●	●	環濠(弥生前期) 竪穴住居(弥生中期) 竪穴住居(弥生後期) 竪穴住居(弥生後期)	東北系
4	大塚山遺跡(村上市)	●	●	79m	69m	●	●	環濠(弥生前期) 竪穴住居(弥生中期)	東北系
5	中津川遺跡(村上市)	●	●	68m	56m	●	●	環濠(弥生前期)	東北系
6	三ツ山遺跡(三上市)	●	●	56m	60m	●	●	環濠(弥生前期)	東北系
7	湯ヶ前遺跡(三上市)	●	●	72m	67m	●	●	環濠(弥生前期) 竪穴住居(弥生中期) 環濠(弥生後期)	東北系
8	大平山遺跡(長岡市)	●	●	100m	100~80m	●	●	環濠(弥生前期) 竪穴住居(弥生中期) 竪穴住居(弥生後期)	東北系
9	長岡山遺跡(長岡市)	●	●	15~20m	40m	●	●	環濠(弥生前期)	東北系
10	高根遺跡(長岡市)	●	●	40~50m	15~20m	●	●	環濠(弥生前期) 竪穴住居(弥生中期)	東北系
11	山ノ内遺跡(長岡市)	●	●	28m	6m	●	●	環濠(弥生前期) 竪穴住居(弥生中期)	東北系
12	山ノ内遺跡(長岡市)	●	●	34m	14m	●	●	環濠(弥生前期) 竪穴住居(弥生中期)	東北系
13	湯ヶ前遺跡(長岡市)	●	●	56m	45m	●	●	環濠(弥生前期)	東北系
14	湯ヶ前遺跡(長岡市)	●	●	100m	65m	●	●	環濠(弥生前期)	東北系
15	大平山遺跡(長岡市)	●	●	32m	20m	●	●	環濠(弥生前期) 竪穴住居(弥生中期)	東北系
16	山ノ内遺跡(長岡市)	●	●	56m	40m	●	●	環濠(弥生前期)	東北系
17	湯ヶ前遺跡(長岡市)	●	●	47m	40m	●	●	環濠(弥生前期)	東北系
18	湯ヶ前遺跡(長岡市)	●	●	90m	80m	●	●	環濠(弥生前期) 竪穴住居(弥生中期)	東北系
19	大平山遺跡(長岡市)	●	●	35~80m	20~45m	●	●	環濠(弥生前期) 竪穴住居(弥生中期)	東北系
20	湯ヶ前遺跡(長岡市)	●	●	36m	20m	●	●	環濠(弥生前期) 竪穴住居(弥生中期)	東北系
21	湯ヶ前遺跡(長岡市)	●	●	31m	22m	●	●	環濠(弥生前期) 竪穴住居(弥生中期)	東北系
22	湯ヶ前遺跡(長岡市)	●	●	13~15m	4m	●	●	環濠(弥生前期) 竪穴住居(弥生中期)	東北系
23	湯ヶ前遺跡(長岡市)	●	●	35~36m	23m	●	●	環濠(弥生前期)	東北系
24	湯ヶ前遺跡(長岡市)	●	●	25~30m	20~25m	●	●	環濠(弥生前期) 住居	東北系
25	湯ヶ前遺跡(長岡市)	●	●	20m	10m	●	●	環濠(弥生前期) 住居	東北系
26	湯ヶ前遺跡(長岡市)	●	●	62m	0m	●	●	環濠(弥生前期) 住居	東北系
27	湯ヶ前遺跡(長岡市)	●	●	10~28m	31~40m	●	●	環濠(弥生前期) 住居	東北系
28	湯ヶ前遺跡(長岡市)	●	●	82~110m	45m以上	●	●	環濠(弥生前期) 住居	東北系
29	湯ヶ前遺跡(長岡市)	●	●	20m	0m	●	●	環濠(弥生前期) 住居	東北系
30	湯ヶ前遺跡(長岡市)	●	●	26m	0m	●	●	環濠(弥生前期) 住居	東北系
31	湯ヶ前遺跡(長岡市)	●	●	42m	30m	●	●	環濠(弥生前期) 住居	東北系
32	湯ヶ前遺跡(長岡市)	●	●	9m	0m	●	●	環濠(弥生前期) 住居	東北系
33	湯ヶ前遺跡(長岡市)	●	●	9m	0m	●	●	環濠(弥生前期) 住居	東北系

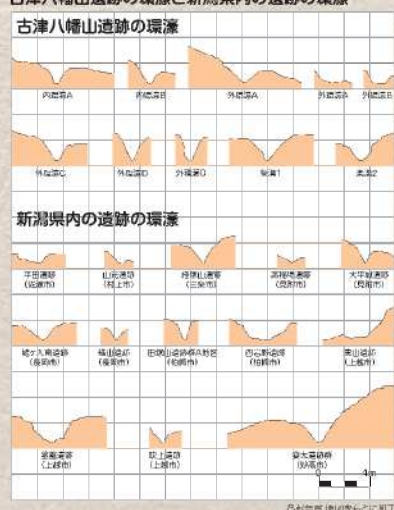
資料:新潟県立文化財調査センター2005年『新潟県防衛的集落の分布』P.117

環濠の規模とかたち

古津八幡山遺跡と、新潟県内の環濠集落の環濠を比べてみました。幅や深さが違いがあり、また断面形にもV字形やU字形(逆V字形)などの違いが見られます。このような違いは、集落の規模や、傾斜地が平地かといった立地、さらには社会背景と色々な要因が考えられます。平地の環濠では断面形は逆V字形が多く、丘陵や台地の環濠ではV字形が多いと考えられます。古津八幡山遺跡では両方の断面形があります。環濠の掘削場所による違いや、防衛上の違いなどが考えられます。



古津八幡山遺跡の環濠と新潟県内の遺跡の環濠



弥生時代の古津八幡山にはどれくらい人が住んでいたか

これまでの発掘調査で確認された弥生時代の竪穴住居の数は約50棟です。発掘調査範囲が全体の3分の1とすると、全体では約150棟の竪穴住居が存在したと仮定できます(50棟×3=150棟)。しかし、同時に建っていた住居の数はずっと少なくなります。集落の続いた260年間を1世代30年とすると約8世代が暮らしていたと考えられます(260年÷30年=8.3)。住居は1世代に約19棟あったと考えられます(150棟÷8世代=18.8)。1軒の住居が5人だとすると一時期に95人(19棟×5人=95人)、4人だとすると76人(19棟×4人=76人)、平均するとおおよそ85人位(95人+76人÷2=85.5人)が住んでいたと推測されます。

環濠を掘る労働力

環濠を掘るためには多くの労働力が必要でした。古津八幡山遺跡の環濠の土量は920m³程と推測されます。10tダンプで約150台分になります。1人が1日に掘削できる土量は0.5m³程度だとすると、速べ1,840人が必要になります。1日に30人が環濠掘りをしたとしても61日かかります。雨天や農作業で忙しい時に中断したとすると、半年近くかかったのでは無いでしょうか。周辺の集落からも掘削作業に来たと考えられます。

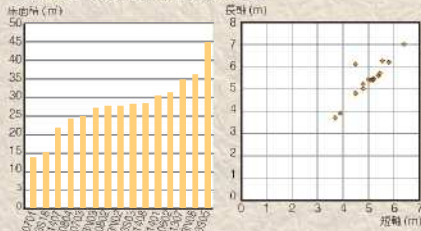


環濠掘削にかかわる労働力

遺跡名	上幅(m)	下幅(m)	深さ(m)	長さ(m)	総土量(m ³)	1人×0.5m ³ /日	推定人口(人)
古津八幡山遺跡※	2.3	0.3	2.4	392	920	1,840	85
福岡県板付遺跡(内環濠)	4	0	2	320	1,210	2,420	—
佐賀県吉野ヶ里遺跡(外環濠)	7	0	3	2,500	24,750	49,500	2,000
大阪府池上宮根遺跡(内環濠)	4	2	2	860	4,386	8,772	1,000
奈良県唐古・鍵遺跡(大環濠)	10	3	2	1,400	21,413	42,826	1,900
神奈川県大塚遺跡(B環濠)	5	2	2	600	4,221	8,442	150

※古津八幡山遺跡の環濠の土量は920m³程と推測されます。10tダンプで約150台分になります。1人が1日に掘削できる土量は0.5m³程度だとすると、速べ1,840人が必要になります。1日に30人が環濠掘りをしたとしても61日かかります。雨天や農作業で忙しい時に中断したとすると、半年近くかかったのでは無いでしょうか。周辺の集落からも掘削作業に来たと考えられます。

古津八幡山遺跡の竪穴住居の大きさ



住居の大きさは一辺7mから4mのものまで大小ありますが、一辺5mが平均的な大きさです。特別に大きな住居はありませんので、まだ身分の階層差は大きくはなかったと思われます。



下馬場遺跡(上越市) 北陸系土器(法仏式)が出土した隅丸方形の竪穴住居

方形周溝墓と土坑墓・壺棺の分布

古津八幡山遺跡は方形周溝墓と土坑墓・壺棺の分布図の外線にあります。



古津八幡山遺跡の方形周溝墓に見られる各地の様相

	北陸	長野	関東	東北南部	新潟
遺構					
方形周溝墓	○	○	○	△	○
組合せ式木棺	○	○	○	×	○
壺棺	×	○	○	○	○
遺物					
土器(天王山式)	×	×	×	○	○
土器(八幡山式)	×	×	×	△	○
鉄製武器の副葬	○	○	○	×	△
石鏡(アメリカ方式石鏡)	×	×	×	○	○

方形周溝墓には各地からの様相が複雑に入り混じっています。



古津八幡山遺跡 竪穴住居(北地区)



古津八幡山遺跡 竪穴住居群(南地区)



東北系土器(天王山式)が出土した円形の竪穴住居

ムラの建物

古津八幡山遺跡では、第18次までの発掘調査で住居が約50棟見つかった。住居は地面を掘り下げてつくる竪穴式で、山から水が流れ込まないように、掘った土を周りに盛り上げて、さらにその外側に溝を掘っています。古津八幡山遺跡の住居の形はすべて隅丸方形(隅の丸い四角形)で、4本の柱と中央に薪を燃やす炉があります。また、壁際には物を貯蔵する穴が見られます。高床倉庫は見つかりませんが、未調査範囲にあったのではないかと推測しています。

方形周溝墓とムラ長

環濠の外側から、方形周溝墓が3基見つかりました。3基という墓の数は、一時期のムラの人口が85人程度と推定されているので、とても少ない数です。有力者に限られていたのでしょう。墓の一つからは埋葬施設が見つかりました。その中に入れられた棺は、木の板を組み合わせた木棺であることがわかりました。中からは短剣と矢筈が見つっていますが、ムラ長に副えられた副葬品と考えられます。



弥生時代後期の社会

古津八幡山遺跡では東北系・北陸系、両地方の特徴を併せ持った地元系の土器があります。それ以前の弥生時代前期・中期も新潟県内では同じような状況でした。日本海・信濃川・阿賀野川を利用して各地域の文化が伝わりました。これらの土器は、竪穴住居から一緒に見つかるので、ともに使われていたことがわかります。外来系は、古津八幡山へやって来た人々がつくったか、それらを真似て、つくられた土器です。



吹上遺跡(上越市)



藤ノ井遺跡群(長野市)

古津八幡山遺跡出土土器の系統別イメージ



古津八幡山遺跡 八幡山式土器 天王山遺跡(白河市)



土器の特徴

系統	特徴	文様
東北系	天王山式	縄文とヘラで描いた文様
北陸系	箱橋式・法仏式	溝板で土器の表面をなでる(ハケ目)
地元系	八幡山式	東北的な器形に北陸的なハケ目による整形手法
その他外来系	長野系(箱清水式) 山陰系	縄文 赤い土器

鹿角の把で飾った鉄剣(鹿角装鉄剣)

方形周溝墓の埋葬施設から見つかった鉄製の短剣です。鹿角の枝の部分でできた把がついていました。遺体の腰部付近に剣先を足の方に向けて副えられていました。類似のものは、東日本の弥生時代中期後半から終末期の遺跡で見つかります。古津八幡山遺跡の鉄剣は東北の事例です。朝鮮半島の鉄剣に日本で鹿角製の把が装着されて、もたらされたと推測できます。布らしいものが付着しており、布で大切に包まれていたことがわかります。

鹿角装鉄剣と鹿角製把分布図



新保田中村前遺跡(高岡市) 鹿角製把



古津八幡山遺跡 鉄剣の把部分

鹿角装鉄剣・鹿角製把の分布

No.	県名	市町村名	遺跡名	鹿角装鉄剣	数量	鹿角製把	数量	遺構	副葬品	時期
1	新潟県	新潟市	古津八幡山遺跡	●	1			方形周溝墓	組合せ式木棺	後期前半(天王山式)
2	長野県	木島平村	根塚遺跡	●	2			方形周溝墓	副葬品	後期(箱清水式)
3	長野県	長野市	石川奈津遺跡			●	1	竪穴住居		後期
4	新潟県	中津川町	天神遺跡	●	1			土坑		後期
5	新潟県	妙高市	早立遺跡	●	1			方形周溝墓		後期
6	新潟県	妙高市	有馬遺跡	●	1			土坑	副葬品	後期
7	新潟県	高崎市	新保田中村前遺跡	●	2			方形周溝墓		後期(徳式)
8	新潟県	高崎市	新保遺跡	●		●	11以上(未成品あり)	土坑		後期終末
9	新潟県	糸井町	文殊堂遺跡	●	1	●	9(未成品あり)	大溝(旧河道)		後期終末
10	静岡県	静岡市	登呂遺跡			●	2	周溝墓	土坑墓	後期中盤
11	静岡県	静岡市	長崎遺跡			●	1(未成品)	遺構外		後期
12	神奈川県	平塚市	王子ノ谷遺跡	●		●		河邊?		後期
13	神奈川県	沼津市	池子遺跡			●	1(未成品あり)	方形周溝墓	主体部	後期
14	神奈川県	横浜市	三股台遺跡			●	1	周溝墓		中期後葉(宮ノ台式)
15	千葉県	茂原市	国府前遺跡	●(未製剣)				竪穴住居		中期終末
16	千葉県	市原市	草刈遺跡	●				旧河道		後期終末
								木棺	土坑墓	後期

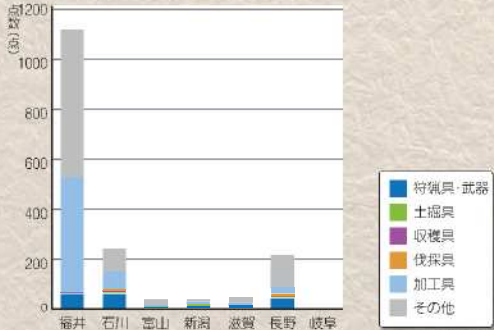
新潟県内の弥生時代の石器の組合せ

丘の上にある大塚遺跡には土器があり、古津八幡山遺跡では石の矢尻がみられますが、森山遺跡で狩猟具・武器が少ないのは、鉄の矢尻が使われていたからでしょう。



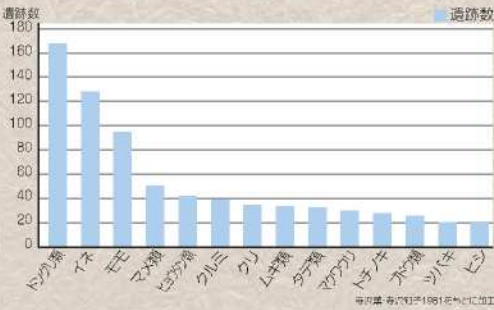
弥生時代から古墳時代前期の鉄器の点数

北陸では東に行くにつれて鉄器の数が少なくなります。



検出遺跡数の多い植物遺存体

全国の弥生時代の遺跡から見つかった植物の種や実です。



西郷遺跡出土の動物遺存体

江南区にある弥生時代前期から中期の遺跡で見つかった動物の骨の数のことです。



石の道具・鉄の道具

新潟県内でも弥生時代中期になると石の道具に代わって鉄の道具が使われるようになりました。鉄はリサイクルされるので、遺跡から見つかる点数は少ないですが、鉄器用の砥石が残されたり、石器が極端に少なくなっただりすることで、鉄器が使われていたことが推測できます。古津八幡山遺跡では、石の矢尻、ドンクリ等をすりつぶす磨石、伐採用の鉄斧、砥石がおもな石と鉄の道具でした。



ムラの食事

弥生時代の遺跡からは米だけではなく、いろいろな植物の種や実が見つっています。日本では豊饒にむとむと台風が来れば、たちまち米が取れなくなり、米を秋に収穫し倉庫に蓄える場合でも、夏には蓄えが少なくなっていました。縄文時代から利用されてきたドンクリ類や、大塚から水田稲作とともに伝った煮に熟す果実類が、米が取れない時の備えになりました。また、狩りも引き続き行われていました。

狩猟活動

西郷遺跡は弥生時代前期から中期の遺跡で、動物の骨が多く出土しています。魚や鳥・哺乳類などの骨はいずれも火を受けていました。出土した骨のなかでも、ニホンジカは同定できた破片数の4分の3を占めており、盛んに利用されていたことがうかがえます。弥生時代になっても、縄文時代以来の狩猟活動が引き続き行われていたものと考えられます。



米の消費量から推測した水田の面積

弥生時代に1人が1日に食べる米の量を2合(300g)と仮定すると、ムラの人口は85人と推定されるので、ムラで1年間に食べる米の量は9,308kgになります。当時の1,000㎡の水田で収穫される米の量は64kg程度と推測されるので、ムラで1年間に食べる米を取獲するのに必要な水田の面積は、145,438㎡(約100×1454m)になります。米2合をご飯にした場合のエネルギー量は1,068kcalなので、1日に必要とされるエネルギー量(2,000kcal)の約半程度です。

弥生時代の米作り

古津八幡山遺跡では、稲作を行っていた直接的な根拠は一つありません。しかし、花粉分析や植物硅酸体(プランクトン)分析の結果により、弥生時代には稲作を行っていたと考えられます。また、古津八幡山遺跡よりも古い江南区西郷遺跡の前期と中期中頃のイネ129点の分析により、時期が新しくなるにつれて、イネが大きくなることから、栽培化が進んだ結果と推定されます。



米の消費量から推測した水田面積の比較

時代	弥生時代	昭和30年代	現代
米を食べる量	1人1日: 300g (2合) ※	600g (4合)	300g (2合)
	1人1年: 109,500g (2俵弱)	219,000g (4俵弱)	109,500g (2俵弱)
ムラの人口(仮定)	85人	85人	85人
ムラで1年間に食べる米の量	9,308kg (155俵強)	18,615kg (310俵強)	9,308kg (155俵強)
米の取れる量(1000㎡あたり)	64kg (1俵強) ※※	360kg (6俵)	520kg (9俵弱)
必要な水田の面積 ※※※	145,438㎡ (14町5反)	51,708㎡ (5町2反)	17,900㎡ (1町8反)
食事スタイル	米が主食にはなり得ない雑穀や縄文時代以来の伝統食料	米が主食	食事スタイルの欧米化、米が主食ではなくなった
水田	新たな水田の開発	肥料・農薬の改良	減反、耕作放棄地の増加

弥生時代の1年間の米の消費量と必要な水田面積(推定)

ムラで1年間に消費する米の量	9,308kg	計算式: 300×365日×85人=9,307,500g
ムラの米年間消費量をつくるのに必要な水田面積	145,438㎡	計算式: 9,308kg÷64kg×1,000㎡=145,437.5㎡

証書1による1,000㎡あたりの米の取れ高	可食部100gあたりの熱量表
上田 106kg	種類 可食部100gあたり熱量
中田 85kg	コメ 356kcal
下田 64kg	トチ 369kcal
下下田 32kg	カシ類 235kcal
	クヌギ 202kcal
	クルミ 672kcal
	クリ 150kcal
	ヒシ 178kcal

米作り

農作業には作業工程や土質によってさまざまな形の鍬や鋤などの農具が使われました。農作業も現在とはだいぶ違うと推測されます。

弥生時代の農作業期と農具



